



Title	研究不正事例を踏まえた「チームで研究を実施する際に留意すべきポイント」
Author(s)	中村, 征樹; 市田, 秀樹
Citation	
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/98576
rights	
Note	研究公正の推進に資する質問紙調査の活用に関する研究 https://research-integrity.info/2019amed/

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

研究チーム内で

データの

チェックを確実に！



生データや実験ノートなどを
研究チーム内で確認・共有していますか？



研究チーム内での情報共有・意思疎通は
きちんと行われていますか？



研究データをきちんと管理・保存していますか？

研究チーム内で データのチェックを確実に！

✓ 生データを研究チーム内で確認・共有する体制を整備する

研究で得られた生データ（実験データ、一次資料等）を研究チーム内でチェックすることを怠ったために、捏造や改ざん、研究データの不適切な処理が見逃されるケースがしばしば発生しています。悪意がなくても、不注意によってデータを取り違えたり、経験不足でデータの処理が不適切であることに本人が気付いていないこともあります。研究ミーティングの際に生データを確認することを習慣化したり、研究チーム内でデータを共有する仕組みをつくるなど、生データを確認・共有する体制を整備しましょう。

発生事案

不正行為：「改ざん」 / 研究分野：薬学（不正事案 2019-03*）

生データから論文データを作成する段階で、論文の主張にとって有利になる形で数値の改ざんが行われていた。不正行為は2009年から2017年までに発表された論文10編にわたり、改ざんが常態化していた。

当該研究室では、定期的にラボミーティングが行われ、実験計画や実験結果について議論が行われていた。しかし、ミーティングで提示されたのは、実験結果をもとに作成された図表のみであり、生データや実験ノートの確認は行われていなかった。

✓ 研究チーム内で相互に 情報共有・意思疎通を十分に行う習慣をつくる

研究チーム内での役割分担は、研究を効率的に進める上で重要ですが、過度な分業は研究チーム内の相互チェック機能を阻害する可能性があります。

データの取得方法、データの具体的な処理方法をはじめ、研究の細部にいたるまで研究チーム内で密な情報共有や意思疎通を行う習慣をつくりましょう。とくに研究責任者や責任著者は、研究や論文全体に対して責任を負っていることを強く自覚し、共同研究者と適切なコミュニケーションを図るように心がけましょう。

✓ 研究データを適切に管理・保存する

研究を進める際、データの管理が適切になされていないがために、データを取り違え、それが論文にまで影響してしまうことがあります。

成果を発表した後も、研究で得られた生データ（インタビュー記録なども）や実験ノート・フィールドノート等は、あとから生データに立ち返って研究を精査・再検討する際にも不可欠です。不正の疑義を向けられたとき、あなたを守るものでもあります。

データの取り違いやミスが発生しないよう、第三者が見ても分かるように研究データを適切に記録・管理しましょう。また、研究が終わったあとも、生データや研究ノート等を適切に管理・保存しましょう。

✓ 出典情報

* 文部科学省「神戸学院大学元教員による研究活動上の不正行為の認定について」。
https://www.mext.go.jp/a_menu/jinzai/fusei/1421614.htm

本リーフレットは 中村文彦，市田秀樹，中村征樹，2021,「共同研究で何に留意すべきか：国内の研究不正事案からの検討」，
RI: Research Integrity Reports. vol. 5, pp. 41-57. <https://doi.org/10.24729/00017487> を元に作成した。

